

## 説教ワンポイント

涙と共に種蒔く者は

ヨハネ四・二七～三八

詩篇一二六

「エゴ・エイミ」。

ヨハネ福音書に繰り返し登場するイエスの言葉です。英語の「アイ・アム」にあたるギリシヤ語で、日常的にとてもよく使われます。ただし、ヨハネ福音書ではイエスが誰であるかを宣言する非常に重要な場面のみでてくる。さかのぼれば旧約・出エジプト記三章、神がはじめてモーセに自らを表す場面でも同じ表現が使われました。いつまでも燃え尽きない柴にモーセが近づくと、突然神の呼びかけが。イスラエルを率いてエジプトを出よ。あまりに大きな使命を与えられ尻込みするモーセ。苦し紛れに神の名を尋ねると、神は答えた。

「わたしはある。わたしはあるという者だ！」

正確な意味はいまだ謎に包まれますが、神の言葉として大切にされてきました。まったく同じ言葉を口にするのがイエス。その初回が今日の場面。ただし相手はユダヤ人ですらありません。むしろユダヤから蔑まれていたサマリヤ人、それも人目を避ける過去をもつ女性に対してイエスは「エゴ・エイミ！（わたしはある）」と。

（新共同訳は「わたしである」と訳出）

永遠に渴くことのない命の水を与える方を前に彼女は最初、モーセのように躊躇していました。あなたと私では「礼拝する場所」が違うではないですか、と。それに対してイエスはこう答えました。（場所や状況が問題なのではない、大切なのは）

「礼拝する時。今がその時なのだ」。

なぜなら礼拝を捧げるべき方が今、この時もあなたの目の前にいるのだから！

二〇一六年六月一九日礼拝より、津田記す